

本願寺史料研究所報

4 5 号

発行所 本願寺史料研究所

〒六〇〇一八二六八

京都市下京区七条大宮上ル

龍谷大学大宮図書館内

電話 〇七五―三四三―三三一―

内線(五四一八)

発行者 所長 赤松徹眞

発行日 二〇一三年一〇月二五日

平松令三先生を悼んで

本願寺史料研究所所長

赤松徹眞

平松令三先生は去る五月十四日にご往生された。享年九十三歳であられた。私たち本願寺史料研究所一同にとって、豊かな学識と優れた知見とともに温厚なお人柄によって長らく親しくご指導をいただいた「学恩」を改めて思うにつけ、痛恨の極みであり、衷心より哀悼の意を表するものである。

先生は、一九一九年十二月五日に津市一身田町にて一身田郵便局長・平松乾三氏の長男として誕生し、一身田尋常高等小学校、津中学校、静岡高等学校を経て、一九三九年四月に京都帝国大学文学部史学科に入学、卒業後、

大学院に進学し、赤松俊秀教授の指導を受け、京都の重宝調査などにたずさわり、後の寺宝を含む文化財調査・保護に関わる学識を身につけられた。敗戦後の一九四六年三月に郷里に帰られて一身田郵便局に勤務し、その後局長を長年にわたって務めた。この間、三重県での文化財調査・研究や高田派専修寺の宝物調査、市町村史の編纂などを務めながら、親鸞研究・真宗史研究に精力的に取り組んだ。そして、一九八〇年四月に龍谷大学に迎えられる。先生は文学部特任教授、そして専任教授に就任した。

先生は史学科国史学専攻や文学研究科国史学専攻での講義・演習を担当するとともに、本願寺史料研究所所長千葉乗隆先生のもとで研究員となつて、真宗の文書・絵画・彫刻など多岐にわたって親鸞・真宗に関わる研究を推し進めた。地元の三重では、県史編纂専門委員会座長、四日市市文化財保護審議会委員、さらに真宗連合学会理事長、真宗高田派本山専修寺宝物館主幹、高田学会委員

などを勤め、三重県や津市から功勞の表彰を受けた。

先生は、戦後の親鸞研究がことに思想を中心に論じたものが多い中で、地域に密着しながら文献や絵画・彫刻などの調査を行い、親鸞の素顔を見たいとの深い思いで研究に取り組まれた。親鸞伝の研究においても、親鸞の素顔を少しでも明らかにしたいとの思いで、「親鸞伝絵」などの研究に集中され、たゆることのない学問への情熱を持ち続けていた。晩年の「白内障」による視力の低下にもかかわらず、拡大した史料の文字を天眼鏡で追いつながら文書解読や絵画などにエネルギーを注がれた。すでに二十年以上前となるが、私は先生の関東の親鸞聖人に関わる旧跡寺院調査にご一緒させていただき、先生の史料を読み取る鋭さと博識に接して、感銘を受けたことが思い出される。

先生の単著には、『真宗史論攷』（一九八八年四月）、『親鸞真蹟の研究』（一九八八年四月）、聖典セミナーリ『親鸞聖人絵伝』（一九九七年二月）、歴史文化ライブラリー『親鸞』（一九九八年四月）、『親鸞の生涯と思想』（二〇〇五年八月）などがあり、『親鸞の生涯と思想』で博士（文学）の学位を龍谷大学から授与された。編集では『真宗史料集成』第七卷「伝記・系図」（一九七五年十二月）、第四卷「専修寺・諸派」（一九八二年十一月）、『真宗新辞典』（一九八三年九月）、『真宗重宝聚英』第二卷「光明本尊」（一九八七年十二月）、第四卷「親鸞聖人絵像・親鸞聖人木像・親鸞聖人絵伝」（一九八八年

六月）、第五卷「親鸞聖人伝絵」（一九八九年二月）、第七卷「聖徳太子絵像・聖徳太子木像・聖徳太子絵伝」（一九八九年二月）、第十卷「絵系図」（一九八八年九月）、『高田本山の法義と歴史』（一九九一年五月）など多く、監修では『真宗人名辞典』（一九九九年七月）、共同執筆では、『念仏と流罪―承元の法難と親鸞聖人―』（二〇〇八年十二月）、真宗教団連合編『親鸞』（二〇〇九年三月）など多数の研究成果を出され、学会、宗門、さらに広く社会に貢献された。

ここに平松令三先生のご遺徳を偲び、本願寺史料研究所に多大の貢献をたまわり、さらに懇切なご指導を頂いた「学恩」に研究所を代表して深甚の感謝を申しあげる次第である。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

《史料紹介》

「祖師四百五十回御忌記」

尾崎誠仁

解題・解説

ここに紹介する史料は、正徳元年（一七一二）（四月に宝永から改元）、三月十八日から二十八日にかけて勤められた、本願寺における親鸞聖人四百五十回大遠忌法要の仏事に関する記録である。当研究所に保管されてい

る。十昼夜にわたり御堂で勤修された法要の次第が記され、御堂内の荘嚴、依用された声明や雅楽の品目、作法の進行とその役割、参勤する僧侶の装束についてなど、この法要で執行された宗教儀礼の綱格を伝えている。なお、当研究所には本史料の他にこの大遠忌の様子を伝える史料として、「祖師四百五十回御忌別記」一冊がある。

まず本史料の書誌について述べる。縦二四・〇cm×横一七・三cm、五七丁。材質は表紙本紙ともに楮紙で、袋綴にされ大和綴の形態で作られている。筆者を特定できる記載はないが、御堂の職務に関係した人物の筆録と考えられる。当研究所には異本が一つ現存するが、これは記載の仕方からして、御堂で作製された本史料を別人物が改めて清書したものであろう。

この法要については、慶証寺玄智が「祖門旧事紀」に、依用された声明の品目を載せている¹⁾。また玄智は、「大谷本願寺通紀」(巻三)で、法要の概要を次のように紹介している²⁾。

凡修道場大踰旧例広張、内陣安階高座、不樹綵幢、或設幄屋、庭儀、班列、執綱、執蓋、公卿著座、或構舞台於殿面、奏楽作舞等、不可殫記、

すなわち四百回忌までの旧例が大きく改められ、新たな法要の形式がこの大遠忌で始用されているのである。それは、本史料中で「大御所」と呼ばれる寂如(一六五一—一七二五)によって元禄期前後に積極的な導入が行わ

れた天台魚山声明が本願寺の法式として定着し、ひとまず完成した形に至ってこの法要が営まれたことを意味している。

『本願寺史』(第二巻)によれば、本願寺宝庫には、寂如が元禄七年(一六九五)八月に魚山声明の嫡流相伝者である宝泉院幸雄(一六二五—一七〇二)に依頼して書写させた「声明集」三帖があり、幸雄の署名入りで次の奥書が付されているという³⁾。

右此声明書者、本門主寂如前大僧正迎先師二十五回忌及三十三回忌之法諱、專興声明之道而悉改正墨譜之章焉、仍令野衲訂考呂律声明之謬誤、且為末弟僧侶教誨聲響、高命難黙不固辭、遂集及三策散画墨譜云爾

また、この声明集に収録された声明曲は次の通りである。

四智讚呂律 着座讚呂律 散華呂律 後唄^{對馬墨譜} 三礼呂律
六種回向 四奉請 弥陀經 合殺 九声念仏 八句
念仏三重 云何唄 始段唄 毀形唄 伽陀十二首 勸

請文三篇 下高座文 報恩講式^{三墨譜} 式問讚 歎徳文
文類偈 十四行偈 讚仏偈

前宗主良如の年忌法要を迎えるにあたり、幸雄は寂如の命に代えて声明改訂に取り組み、あわせて本願寺内の僧侶へ声明の教授を行ったという。この幸雄編「声明集」に収録された曲目の成り立ちについて、のちに本願寺から魚山に学び、声明相伝者の系譜に名を連ねた光隆寺知影(一七六三—一八二五)は「魚山余響」に⁴⁾、

讃仏偈・文類・十四行偈・着座讃・敬礼・勧請・式
間和讃ハ幸雄僧都ノ墨譜ナリ、讃仏偈ハ法華懺法経
段呂ノ墨譜ニヨレリ、文類ハ五念門ト画讃ヲアハセ
トルト見ヘタリ、十四行偈ハ懺法例時両経段ヲアハ
セトレリ、着座讃ハ呂律トモ四智漢語ノ讃ヲトリ用
ユ、敬礼・勧請・式間和讃ハヨリトコロタシカナラ
ズ、幸雄ノ工夫ト見エタリ、

と追跡を試みている。幸雄は、讃仏偈・文類・十四行偈
など、真宗所依の経論の文に魚山声明の墨譜を適用して
真宗用の声明曲とする一方で、敬礼・勧請・式間和讃な
どには、自ら新たに作曲も行っている。これら幸雄作の
声明曲は本史料中でも要所で確認でき、当時の本願寺法
式に対して幸雄が果たした役割の大きさが知られる。

元禄六年に御堂衆となった光頼寺乗貞は「御堂衆略
譜」に、寂如期の声明について述べている。⁽⁵⁾それによる
と、延宝六年(一六七八)の良如十七回忌と経蔵慶讃の
時すでに本格的に魚山声明が取り入れられていて、幸雄
編「声明集」にも収録される「四智讃」の墨譜が新たに
附され、「六種回向」がここで初めて用いられた。その
後、貞享三年(一六八六)の良如二十五回忌、元禄二年
の新門住如得度に合わせ諸式を改めた。また元禄二年の
報恩講では、それまで東西本願寺で用いられていた「坂
東節」が廃止されて「八句念仏」とされる。このように、
寂如は重要な法要行事を迎える度に法式に検討を加え、
それまでの勤行形式を改めて魚山声明導入を漸進させた。

これら一連の改革が集成された法要として、四百五十回
大遠忌を位置づけることができるであろう。

その他この大遠忌に新制された法式は、九具足による
祖師前莊嚴や舞楽の依用、蓮如によって停止されて以来
となる往生礼讃の再用など、以後の大遠忌の先例となる
ものが多い。本史料の分析研究とともに今後の課題とし
たい。

次にこの法要を執行した人々について注目すると、史
料中に主に名が見えるのは、大御所寂如、新門住如の他
に、導師・会奉行を勤めた勤番衆(親鸞真影の鑑役)、
声明の句頭唱出や打物などの諸役を担った御堂衆である。
勤番衆については皆「司鑑録」に名が記されている。⁽⁶⁾

それによれば、法盛寺寂静は元禄十五年、毫摂寺寂性は
翌十六年に新たに勤番に任命されていて、いずれも大遠
忌に備えて寂如が任じたものと指摘されている。⁽⁷⁾「司鑑
録」(法盛寺の巻)には法盛寺寂静の就任について、声
明に精通していたことが大きな任命理由の一つとなった
ことを記している。

右法盛寺寂静ヨリ、新家巡賛被仰付之最初也、併此
寂静儀ハ、御当家声明方、始魚山声明道等其外、何
角御直ニ御吟味被遊、御指南共之事、殊余間之寺ニ
テ候ヲ、御取立之事、一向先思召儀、格別之儀ニ存
候、

とあり、寂如が大遠忌を迎えるに際して声明に重点を置
いていたことがここからも読み取れる。また本行寺寂玄

はこの年十八歳、教行寺寂幽は十九歳で、大遠忌直前に新たに鑑役とされたようである。また「司鑑録」に名は見えないが、寂如の弟である本徳寺寂円（考槃院）の子寂宗も要所で導師を勤めている。

本願寺の家臣名を記録した「御家中衆次第」⁹⁾によると、この年勤仕した御堂衆は「御雇」三十人を合わせ計六十人にのぼる。大遠忌前の宝永三年九月には三十二人、法要後の正徳三年五月は四十五人（正徳二年に御堂衆から堂達と改称）である。わざわざ「御雇」と記された御堂衆は大遠忌の年にも見られるから、臨時に登用したのであろう。「紫雲殿由縁記」には、

今般御法事ニ声明大原徳専坊 仏眼院被_レ参候テ大ニ改ル、金剛寺ト申声明者、御堂衆ニ出来ル、継テ敬宗寺重規寺新座之人々、皆声明者一両輩モ有_レ之専声明正信偈和讃ハ今度御法事之勤無_レ之、漸々齋非時頭人之勤行計リ、

とあり、御堂衆採用にも声明に熟達していることが条件となっていたことが窺える。勤番衆の任命事情と併せ考えると、法要での円滑な儀礼執行が重要な課題となっていたと推察される。

当時の御堂衆の教学面における活躍も興味深い。先の「御家中衆次第」では御堂衆筆頭に光隆寺知空（一六三四―一七一八）の名があるが、彼は元禄八年に再興された学林の能化として同時代の教学を牽引した人である。法要中には中日の二十三日に「御伝記」（『御伝鈔』）を

拝読している。知空の他にも学林に開講した御堂衆は多い。また教学だけでなく使僧や別院輪番として宗主代理を務めるなど、寂如代における御堂衆の職務領域の広さは注目される。

ところで、これまで寂如の声明導入には先の幸雄が指南役となったことが指摘されてきた¹¹⁾。しかし幸雄は四百五十回忌を待たずして元禄十五年に没している。それにもかかわらずこの大遠忌当時の諸記録には、大原から声明師が来山したという記事が見える。「長御殿御日次之記」宝永八年三月二十一日条には、

一 白銀三枚 小原 宝泉坊江

此間者長々御逗留被成、当僧衆江

声明御指南、且又御声明書墨譜

御附被進、別而御満足思召候、依之

目録之通被贈遣候旨、於占春亭相渡ス

とあり、法要直前には大原宝泉院から本願寺に逗留して声明指導にあたり、声明書に墨譜を附して進上したという。寂如はこれを賞し白銀三枚を贈った。当時の本願寺僧衆にとつては綿密な習礼を必要とするほどに読誦の難しい声明であったのだろうか。同じく「日次之記」法要結願日の二十八日条には、大原仏眼院から、

御法会御首尾能御勤被遊、今日御結願成目出度奉存候、為御歎参上仕候

という旨の報せがあったという記事がある¹²⁾。先掲の「紫雲殿由縁記」にも「仏眼院」の名が見え、この法要に際

して仏眼院が声明に關して助力し、結願日には参拝したものとされる。「御堂衆略譜」には幸雄のことを仏眼院と呼ぶ記載があるが、大原魚山各院の歴代住職略歴を記した「両院僧坊歴代記」によると、幸雄の弟子である珍雄（一六七三—一七六八）が仏眼院の号を与えられていて、一時宝泉院に住したという⁽¹³⁾。珍雄は後に住如の声明指南役となり、寂如の三回忌に用いる声明曲制作を依頼されている。あるいはこの大遠忌に際しても珍雄が大原より出向し指導にあたったのかもしれない。魚山と本願寺の交流史が今後より明らかになることが期待される。なお史料翻刻にあたっては基本的に新字体を用い、人名・寺号などの固有名詞はそのまま反映した。

〔注〕

- (1) 『新編真宗全書』史伝編二、思文閣、一九七五年、二七〇—二七二頁。
- (2) 『真宗史料集成』第八卷、同朋舎、一九七四年、三九五頁。
- (3) 本願寺史料研究所編『本願寺史』第二卷、浄土真宗本願寺派、一九八一年、五九〇—五九一頁。
- (4) 龍谷大学大宮図書館蔵。
- (5) 『真宗史料集成』第九卷、同朋舎、一九七六年、八〇一頁。
- (6) 本願寺史料研究所保管。日野照正『本願寺の論役』（自照社、二〇〇六年）所収。
- (7) 日野前掲書、九七頁。
- (8) 同書、二八六頁。
- (9) 本願寺史料研究所保管。

(10) 『真宗全書』第七〇卷、藏経書院、一九一四年、四三三頁。
 (11) 經谷芳隆「親鸞聖人の御遠忌と聲明」(『龍谷大学論集』第三六五・三六六合併号、一九六〇年)、播磨照浩「浄土真宗に於ける天台声明の受容」(『印度学仏教学研究』第二六卷第一号、一九七七年)、天納傳中「魚山聲明と眞宗聲明との關連についての一考察」(『天台學報』第二七号、一九八五年)など。

(12) 本願寺史料研究所保管。

(13) 『續天台宗全書』法儀一、春秋社、一九九六年、五二二頁。

(おさき・せひと 本願寺史料研究所研究生)

龍谷大学大学院文学研究科真宗学専攻修士課程)

※ ※ ※ ※ ※

(以下、史料本文)

(表紙)

「宝永八辛卯歳三月從十八日至廿八日

祖師四百五十回御忌記

」

宝永八辛卯年從三月十八日

至同廿八日 祖師聖人四百五十回

御忌御法事之記

一 三月十七日 御眞影北ノ余間エ御遷座」(二丁オ)

御行水有之諸式如例年霜月廿日御掃除

一 十八日晨朝御法事過兩御堂莊嚴有之

一 供物須弥壇上置二重段備之左右

合テ五十合也此内大供物四角ニ一ツ、備之」(二丁ウ)

金銀紅三色ノ牡丹ノ花指之供物段

金欄ニテ^(裏)畏之

一大卓飯卓ナリ双華立之蠟燭立ハ

六本ナリ花ノ前ニ並ヘ三ツ、立之金香炉」(二丁オ)

土香炉荘之卓ノ上水曳打敷

新キヲ用

一大卓ノ前ニ礼盤磬台等荘之脇卓

前卓打敷新」(二丁ウ)

一新御戸帳

一内陣真鍮ノ天蓋掛之両輪灯牡丹

模様ナリ

一教興院様大衣之御影也」(三丁オ)

一御代ノ間信楽院様信光院様両御影像也

一十字九字ノ間八幅ノ絵伝掛之菊灯台

二ツ、出之晨朝初夜御法事ニ点燭

一御連枝院内衆経卓一脚ニ三部経載セ」(三丁ウ)

卓人数ホト出之南北余間ノ闕際コ

ホレノ衆同断次ニ余間衆ノ経卓

新キ黒塗中ノ経卓五部ツ、載セ出之

次ニ三ノ間衆同卓ニ出之飛檐ノ間新キ」(四丁オ)

黒塗長卓百部ホトツ、載出置之但シ

初中後日中公卿着座ノ節ハ

北ノ方コホレノ経卓不出之

一楽器ハ北ノ三ノ間出之鑿太鼓南三間ニ」(四丁ウ)

出置之日中御法事ニ外陣エ出之

楽器ハ速夜御法事ニモ出之外陣

一花籠台南北ノ三ノ間西ノ方ニ置之

御法事前後門ニ入也開結中ノ外不出」(五丁オ)

一御堂之内外陣壁代張之

一阿弥陀堂御供物十二行前卓双花

土香炉有之礼盤磬台等如例

御戸帳打敷等新キ掛之」(五丁ウ)

一新キ六角天蓋釣之

御法事之次第

一十八日速夜申刻始同刻半過終

大御所様御出座 新門様御登高座」(六丁オ)

草座三衣箱從僧^{光永寺}了瑞持出 乱声

音取 登高座音楽ノ内塗香焼香念珠

弥陀懺法 ^{御導師手炉御取}磬一丁 三敬礼終二丁

敬礼ノ二字コトニ御導師礼 次供養文終二丁」(六丁ウ)

御導師片膝立各々 次一心奉請文終二丁

御導師長跪合掌 ^{南無本師釈迦ノ文ヨリ}衆僧立一切賢聖ノ文ニ

至テ御導師衆 次上来奉請文終二丁

次敬礼段終二丁 御導師蹲踞^{東方不動仏}」(七丁オ)

衆僧立一心敬礼大智舍利弗文ニ至テ敬礼

ノ字ニテ御導師礼大智ノ字ニテ衆僧座ス

次音楽 次普為法界ノ文終二丁 次

我比丘終二丁 御導師片膝立 次音楽

次十方念仏 ^{始盤二丁} 遶堂^{内陣列衆}」(七丁ウ)

次觀經真身觀 ^{終盤} 次念仏 次音楽

^{遶堂終テ御導師御} 次三礼文 ^{始磬一丁} 蹲踞二丁終二丁

御導師衆僧共ニ蹲踞当願ノ字コトニ御導師礼聖衆ノ字ニ至テ共ニ座ス 次白衆等ノ文終三丁(八丁才)

次退出音楽

一同初夜法譚 金光寺 御法事中

九座共ニ同人勤之法譚終テ日没勤行

有之毎夜同断(八丁ウ)

一十九日晨朝丑刻始寅刻終

阿弥陀堂 漢音小經 調声毫撰寺

大御所様御出座 御影堂

新門様御登高座塗香焼香念珠 晨朝礼賛偈(九丁才)

始磬二丁 懺悔前丁 作梵前丁 作梵終無上菩提丁

諸衆等聴説前丁 讚念仏前丁 往生安樂国

三丁 已下毎晨朝礼賛偈磬如斯

御文章御正忌 炤善寺(九丁ウ)

一同日齋辰刻 新門様御出座

一同日中午刻半始未刻半終

御導師新門様 從僧居箱ニ持立供奉ス

幄屋ニテ喚鐘鳴テ呂四智賛 重規寺(二〇丁才)

鏡延壽寺義潭 鉢炤善寺教應

公卿着座三人

一内陣正面ヨリ新門様御入

祖師前工御一拜有御着座也(二〇丁ウ)

大御所様御出座但後門ヨリ御入

登高座音楽 御登高座塗香焼香念珠

唄呂始磬一丁 法盛寺 散花呂柄香炉御取一丁

音楽 勧請願諸世界始一丁 音楽(二二丁才)

法則始二丁終一丁 音楽 鑿二丁 三部誦誦

毎誦切ニ以ニ止音発音ニ毎ニ經之間 音楽有之

音楽 九声念仏始鑿二丁終二丁 六種回向

一切誦磬一丁 音楽 回向伽陀(二二丁ウ)

大御所様回向伽陀之間御焼香

退出音楽

一於阿弥陀堂 両御所様御焼香

次本徳寺殿焼香院内拜礼有之(二二丁才)

一同非時 新門様御出座

一同待夜 申刻過始酉刻前終 新門様御出座

大御所様御不座 乱声 音取 音楽

登高座塗香焼香念珠 毫撰寺 三敬礼(二二丁ウ)

磬始二丁 供養文終一丁 敬礼段終一丁

十四行偈終五丁 退出音楽

一同日初夜同前

一廿日晨朝寅刻始卯刻終 新門様御出座(二三丁才)

大御所様御不座 弥陀堂 漢音小經 調声法盛寺

御影堂 登高座塗香焼香念珠 本徳寺殿

日中礼讚偈諸式如前 御文章中古已来 円成寺

一同日齋辰刻 大御所御出座(二三丁ウ)

一同日中午刻前終 両御所様御出座

乱声 音取 伽陀ニ光明 延壽寺

音楽 登高座塗香焼香念珠

勧請敬礼十方始磬二丁 音楽 鑿二丁(二四丁才)

三部誦誦切コトニ止音発音
經ノ間音楽有之 音楽

九声念仏始盤二丁
終二丁 六種回向一切誦磬一
丁終三丁

回向伽陀 退出音楽開結中三聲ノ日中
ヲ除テ余如今日日中

一同日非時 新門様御出座「(二四丁ウ)

一同速夜申刻前始
酉刻前終 両御所様御出座

乱声 音取 音楽 登高座塗香焼香
念珠 本善寺

勧請我弟子
始磬二丁終二丁 三十二相 太鼓 金剛寺

羯鼓 廓道 鉦鼓 教應 後唄略始一丁
終三丁「(二五丁オ)

退出音楽

一同日初夜同前

一廿一日晨朝丑刻半始
寅刻半終 両御所様御出座

弥陀堂 漢音小經調声本照寺中将「(二五丁ウ)

御影堂 登高座塗香焼香
念珠 本善寺 日没礼贊偈

諸式如前 御文章三ヶ条 延壽寺

一同日齋 新門様御出座

一同日中巳刻過始
午刻終 新門様御出座「(二六丁オ)

大御所様御不座 伽陀瓔珞經中
慶證寺
教應

登高座 本善寺 三部誦誦

一同日非時 大御所様御出座

一同太夜未刻半始
申刻半終 両御所様御出座「(二六丁ウ)

乱声 僧讚終早鉢有之上段斗
賢應
円識

鏡 妙順寺 鉢惠敵 登高座塗香焼香
念珠 興善寺

画讚始磬二丁
終一丁此内中程二重ノ掛口若救

頭燃勤大篤ノ句ノ終ニテ早鉢有之上段
斗終リ故採一端聊記事ニテ早鉢有之」(二七丁オ)

仏讚終早鉢有之 退出音楽

一同初夜法談終テ於
阿弥陀堂 漢音小經調声毫撰寺

一廿二日晨朝寅刻半始
卯刻過終 新門様御出座

大御所様御不座 阿弥陀堂 太子御影前「(二七丁ウ)

登高座 教行寺 法事如例月 御影堂

登高座塗香
焼香念珠 教行寺 初夜礼讚偈

諸式如前 御文章八ヶ条 正光寺

一同日齋 新門様御出座「(二八丁オ)

一同日中巳刻半始
午刻過終 新門様御出座

大御所様御不座 伽陀安樂寺
惠敵

登高座 興善寺 三部誦誦

一同日非時 新門様御出座「(二八丁ウ)

一尺三寸ノ弥陀ノ木像礼盤前卓ノ先ニ

奉安置礼盤ノ前ニ香炉卓ヲ出シ

土香炉香合ヲ載速夜前ニ出置キ

速夜過収之」(二九丁オ)

一同日速夜申刻過始
酉刻過終 新門様御出座

大御所様御不座 登高座塗香
焼香念珠 本徳寺殿

如法念仏 先衆僧集会ノ報鐘 次衆僧

入堂ノ喚鐘常ノコトシ喚鐘打畢テ上座「(二九丁ウ)

ヨリ次第二立後門ニ於テ花筥ヲ執持シ

左右ヲ分テ礼盤前ニ到リ低頭シテ

ヒサマツキ花筥ヲ右方ニ置焼香シテ

合掌シ花筥ヲ持テ立低頭シテ各々ノ」(三〇丁オ)

座ニ着花筥ヲ右ノ方ニ置衆僧皆

入堂終テ衆人乱声ヲ発ス 音取

伽陀衆罪如霜露 長円寺 伽陀畢テ

衆 衆発ルト同ク衆僧花管ヲ持テ起立シ」(二〇丁ウ)

一同ニ低頭シテ無言行道一逆衆僧ハ

本座ニツキ本徳寺殿柄香炉ヲ取

如常三礼シテ登高座焼香持念シテ

衆止時磬二丁下座本徳寺殿衆僧」(二二丁オ)

一同ニ花管ヲ持列立シテ本徳寺殿

召請ノ偈ヲ発ス 先請等ノ三偈

唱終テ低頭シテ本徳寺殿ハ礼盤ニテ

蹲踞衆僧ハ本座ニ着キテ蹲踞ス」(二二丁ウ)

此間発衆衆止テ磬二丁三礼文ヲ

唱フ 至心敬礼等ノ句 礼終テ

磬二丁衆発 本徳寺殿下座衆僧

列立三奉請ヲ唱散華衆ノ句ニテ」(二二丁オ)

花ヲ散ス三奉請終テ誦賛行道

道場莊嚴等ノ七偈唱終テ低頭ス

衆発ス本徳寺殿登高座衆僧着

座衆止テ磬二丁 八句念仏ヲ唱二丁」(二二丁ウ)

懺悔二丁 勸請二丁 随喜二丁 回向二丁

発願終テ磬二丁 本徳寺殿下座

衆僧列立此間衆発ス衆止テ悲喜

交流ノ偈ニテ行道三偈終ラントスル時」(二三丁オ)

各本座ノ前ニ列立シ偈唱終テ

本徳寺殿慚愧ノ偈ヲ発ス衆僧

同音偈唱終テ本徳寺殿願以此功

徳ノ偈ヲ唱フ衆同音唱へ終テ衆発」(二三丁ウ)

一同ニ低頭シテ本徳寺殿ハ礼盤ニテ

蹲踞衆僧ハ本座ニテ蹲踞衆止テ

磬二丁南無本師等ノ三礼文ヲ唱フ

終テ磬三丁衆発ス本徳寺殿柄香炉」(二四丁オ)

ヲ脇卓ニ置焼香持念シ柄香炉ヲ

執テ下高座一礼シ柄香炉ヲ脇卓

ノ上ニ置キ花管ヲ執テ衆僧一同ニ

如前無言行道シテ本座ニ着ク衆」(二四丁ウ)

止ム退出ノ衆ヲ発ス御退出衆止テ

衆僧花管ヲ持テ列立シ低頭シテ

次第二出堂

一同初夜」(二五丁オ)

一 廿三日晨朝寅刻始 同刻過終 新門様御出座

大御所様御不座 弥陀堂 漢音小経 調声法盛寺

御影堂 登高座塗香焼香 念珠 本照寺中将

中夜礼賛偈 諸式如前 御文章大坂建立 光永寺」(二五丁ウ)

一 晨朝過ニ内陣大卓ノ南北ニ東ノ方へ

ヨセテ階高座両方ニ出之北ノ方階

高座前卓脇卓打敷掛之前卓ニ

経台ヲ置金香炉塗香器ヲ備花」(二六丁オ)

瓶ニ櫛ヲ立置西ノ方ノ卓ニ磬台ヲ

置ク北階高座ハ大御所様之御座也

南方階高座前卓脇卓モ打敷掛之

經台磬台右同新門様ノ御座也」(二六丁ウ)

一 御堂檐正面北ノ方ニ鑿出置楽屋ハ
アイヅノ鑿也

一同日齋 新門様御出座

一同日中午刻」(二七丁オ)

大御所様御導師 幄屋ニテ喚鐘

鳴テ四智讚呂 焯善寺 鏡 妙順寺 瑞道

鉞廓道 教應

公卿着座三人」(二七丁ウ)

一 内陣正面ヨリ御導師御入

祖師前エ御一拜有御着座也

一 三衣函從僧持之先供シテ内陣正面ヨリ

入り御導師御着座有テ御座ノ」(二八丁オ)

左右ニ置之御登高座ニ及テ如意

声明本入ル三衣函北ノ階高座ノ

右ノ脇卓ニ從僧俊鬘置之柄香炉

塗香器入ル三衣函階高座左ノ脇卓ニ」(二八丁ウ)

從僧忍海置之也御法事終テ

御導師御退出ニ及テ從僧兩人如初

三衣函ヲ持先供ス

一 新門様後門ヨリ御出堂御着座」(二九丁オ)

三衣函從僧光永寺 音持出

新門様御着座已後御声明入ル三衣函ハ

直ニ南階高座ノ右ノ脇卓置之柄香炉

入ル三衣函ハ御座ノ左ノ方ニ置ク及ニ」(二九丁ウ)

御登高座ニ階高座ノ左ノ脇卓ニ置之

御法事終テ及ニ御退出ニ從僧兩人如始

三衣函ヲ持先供ス但シ結願日中從僧

ノ式右同断 次ニ発楽始盤一丁 終二丁平調音取」(三〇丁オ)

慶雲楽 両御所様 祖師前御三拜

在テ御登高座塗香燒香念珠 次

三礼始磬二丁中ニ 終一丁 次発楽 老君子

次勸請始一丁 終一丁 読師卷經御頂戴在之」(三〇丁ウ)

磬二丁 經題ヨリ一切斗御読誦

次講讚 弥陀宝号一丁 觀世音菩薩二丁

大勢至菩薩一丁 一切三宝一丁 終二丁

次对揚 句頭本行寺 教行寺但シ对揚ノ内鑿二」(三一丁オ)

舞楽始ル 振舞三節 万歳楽 延喜楽

迦陵頻 胡蝶 次六種回向一切誦一丁 終三丁

降高座 御導師入御

両御所様舞楽御見物衆僧不残拜見入調舞」(三一丁ウ)

打毬楽 狛鈴 太平楽 古鳥蘇

陵王 納曾利 長慶子

一同日非時 新門様御出座

一同日逮夜申刻半始酉刻半終」(三二丁オ)

両御所様御出座 乱声 音楽

登高座塗香燒香念珠 法盛寺

例時 四奉請始磬一丁 終一丁 弥陀經終一丁

甲念仏終一丁 回向我等所修終五丁」(三二丁ウ)

音楽

一同初夜 酉刻半始戌刻半終

御伝記 光隆寺

一 廿四日晨朝寅刻半始 同刻半過終 両御所様御出座〔三三丁才〕

弥陀堂 小経漢音 調声本照寺中将

御影堂 登高座塗香焼香 念珠 本行寺

後夜礼賛偈 御文章毎年不闕 願成寺

一同日齋 両御所御不座〔三三丁ウ〕

一同日中巳刻過始 午刻過終 両御所様御出座

伽陀円亮 乘惠 登高座 法盛寺 三部読誦

一同日非時 大御所様御出座

一同速夜申刻過始 酉刻終 両御所様御出座〔三四丁才〕

乱声 音楽 登高座塗香焼香 念珠 教行寺

文賛始磬二丁 終一丁 懺悔終三丁 音楽

一同初夜 引続阿弥陀(マ) 小経漢音

調声 毫撰寺 如廿一日〔三四丁ウ〕

一 廿五日晨朝寅刻前始 卯刻前終 新門様御出座

大御所様御不座 弥陀堂 円光大師

御影前 登高座 本照寺中将 御影堂 登高座

塗香焼香 念珠 興善寺 晨朝礼賛偈〔三五丁才〕

御文章 六ヶ条 靈光寺

一同日齋 新門様御出座

一同日中巳刻過始 午刻過終 両御所様御出座

伽陀春海 義潭 登高座塗香焼香 念珠 教行寺〔三五丁ウ〕

三部読誦

一同日非時 両御所様御不座

一同速夜 申刻過始酉刻前終

両御所様御出座〔三六丁才〕

乱声 音楽 登高座塗香焼香 念珠 本照寺中将

大懺悔始磬二丁 五念門終五丁

回向伽陀願共諸衆生 乘惠 音楽

一同初夜 引続阿弥陀堂 小経漢音 調声法盛寺〔三六丁ウ〕

一 廿六日晨朝寅刻過始 卯刻終 新門様御出座

大御所様御不座 弥陀堂 登高座 毫撰寺

御影堂 登高座塗香焼香 念珠 毫撰寺

日中礼賛偈 御文章超世ノ本願 教宗寺〔三七丁才〕

一同日齋 新門様御出座

一同日中巳刻半前始 午刻終 両御所様御出座

伽陀光恩寺 嶺翁 登高座 本照寺中将 三部読誦

一同日非時 大御所様御出座〔三七丁ウ〕

一同速夜未刻半始 申刻過終 新門様御出座

大御所様御不座 乱声 着座賛廓道 教應

音楽 登高座塗香焼香 念珠 本行寺

文賛始磬二丁 終一丁 十方念仏終一丁〔三八丁才〕

下高座文 通戒偈終三丁 退出楽

一同初夜 引続阿弥陀堂 漢音小経 調声本照寺中将

一 廿七日晨朝丑刻半始 寅刻半終 両御所様御出座

弥陀堂 登高座 教行寺 御影堂 登高座〔三八丁ウ〕

塗香焼香 念珠 慈敬寺 日没礼賛偈

御文章 鸞聖人 光頼寺

一同日齋 新門様御出座

一同日中 巳刻前始
午刻前終 両御所様御不座」(三九丁オ)

伽陀 廓道
教應 登高座 塗香
念珠 本行寺

三部読誦

一同日非時 新門様御出座

一速夜前 御戸帳大卓打敷水引改ル」(三九丁ウ)

一同速夜 未刻過始
酉刻前終 両御所様御出座

新門様御登高座 乱声 音取 伽陀 金剛寺
教宗寺

登高座音楽 礼文 呂磬一丁
終一丁 同音 教行寺
本行寺

式三重 始磬二丁 八句念仏 本徳寺殿」(四〇丁オ)

式間高僧賛巡讚 法盛寺
教行寺 本善寺
中将 本行寺

嘆徳文終二丁 下高座文 処世界
終三丁

降高座音楽 回向伽陀 退出音楽

御文章 御俗姓 専修寺」(四〇丁ウ)

一同初夜

一点心 丑刻

一廿八日晨朝 寅刻前始
卯刻前終 新門様御出座

大御所様御不座 弥陀堂 漢音小経 調声毫撰寺」(四二丁オ)

御影堂 登高座 塗香
念珠 法盛寺 初夜礼賛偈

御文章無之

一同日齋 両御所様御出座

一日中高辻少納言菅原総長朝臣」(四二丁ウ)

御願文持恭御影堂御門ヨリ進入堂アリテ
十字之間御畳ノ南ノ間ヨリ進北ノ方

公家衆休息所ニテ暫被指控時

大御所様後門ヨリ公家衆着座之間マテ」(四二丁オ)

御出高辻少納言殿ニモ休息所ヲ被出

御願文ヲ大御所様へ被上大御所様ヨリ

法盛寺へ被遣法盛寺御願文ヲ

祖師前ノ中央ノ卓ニ新写ノ御経ト双置」(四二丁ウ)

高辻少納言殿御書院へ被通也

大御所様 御鈍色 五条 指貫

高辻少納言殿 衣冠也 法盛寺 中将

素絹 五条 指貫」(四三丁オ)

一祖師前大卓之前ニ朱塗中央卓出之

打敷掛之御願文並新写ノ御経備之

一階高座荘之如中日

一同日中巳刻半過始未刻終」(四三丁ウ)

公卿着座三人

大御所様御導師 帳屋ニテ喚鐘鳴テ

四智讚 呂
教宗寺 鏡 延壽寺
義潭 鉞 惠嚴
廓道

一内陣正面ヨリ御導師御入 祖師前へ」(四四丁オ)

御一拝有御着座ナリ新門様

後門ヨリ御出堂御着座唱惣礼

二音 本照寺中将 衆僧三礼 但シ内陣

列衆四十八人 音楽 両師御登高座」(四四丁ウ)

式法如中日 塗香
念珠

一御両師江 殿上人被配華籠
一衆僧配華籠諸大夫衆但シ内陣列衆

四十八人之外ハ御堂衆配之」(四五丁オ)

磬一丁 本行寺 但シ磬台内陣北ノ方前側ノ列衆ノ下座ニ置之

唄 匿呂 本徳寺殿 磬二丁 本行寺

散華 金剛寺 教宗寺 大遶堂一匝

磬三丁 内陣列衆華籠ヲ持テ座ヨリ下リ」(四五丁ウ)

列立シテ散華 発句頭 香華供養仏

コトニ散レ華 散華二段目 散華莊嚴ノ

句頭終テ各々低頭シテ内陣双方ノ

上首ヨリ次第二外陣へ出テ双方ヨリ」(四六丁オ)

正面ニ進ミ祖師前ニテ一拜二行ニ

引列シテ東方檐ニ至リ是ヨリ南北ニ

別テ遶堂後堂ニテ入チガイ正面ノ檐

ニテ南北ヨリ相合テ如レ初二行ニ成リ」(四六丁ウ)

外陣ニ入り祖師前ニテ一拜南北へ別テ

内陣ニ入り各々本座ニ着ス但シ唱ニヘテ

散華句ニ遶堂ナリ 御両師遶堂不被成

次ニ本徳寺殿不レ及ニ遶堂ニ遶堂ノ僧衆」(四七丁オ)

院内余間御堂衆ナリ但シ余間衆

遶堂ノ時バカリ從ニ後門ニ出入遶堂已テ

散華句頭役唱之

御願成弁観自在尊磬二丁 本行寺」(四七丁ウ)

取新写御経置講師之御 法盛寺

御願文置読師之御前 法盛寺

次神分始磬一丁手炬御取一丁

般若心経一丁 大般若経号一丁」(四八丁オ)

奉為金輪聖王玉体安穩葉師宝号一丁

尊勝仏頂一丁 観音宝号一丁 大悲多門天王二丁

五大明王一丁 南無当山三宝一切三宝二丁

次表白 講師御唱」(四八丁ウ)

願文捧読可レ奉レ備ニ聖衆ノ高聴」講師御唱

御願文 始磬二丁 終一丁 読師御読畢一丁

御願文如是 三宝諸天 知見証明シ玉へ

右講師御唱」(四九丁オ)

音楽 次揚経題 抑新写之御経可拝首題

講師御唱 次読師揚無量寿経之題号 始磬二丁 甲乙二返

次観無量寿経 甲乙二返 次阿弥陀経 甲乙二返

次発願終二丁 次四弘誓 護持仏子成大願」(四九丁ウ)

次小祈願 弥陀宝号一丁 三部上乘一丁

観世音菩薩一丁 音楽 次仏名 如意御取

次勸請 手炬御取 次音楽

次講師唱無量寿経題号 次如意 御取」(五〇丁オ)

経积 次表白 次六種回向 略一切 調誦三丁

次降高座音楽 次両師向祖師前御

焼香

一 同音楽之内本徳寺殿焼香次院家上首」(五〇丁ウ)

兩人焼香 退出音楽

一 於阿弥陀堂 両御所様御焼香有之

次本徳寺殿焼香 次院内衆拜礼

一 廿八日々中御法事諸式終於御影前」(五一丁オ)

考槃院殿 焼香並於外陣 下間刑部卿

同少進 同大貳 同兵部卿 池永主税
横田監物 焼香有之

鑿 正光寺 円亮 長円寺 蘭應 太鼓 安樂寺 覚円 超玄 (五二丁ウ)

花籠相渡役者 乘應 乘惠 円識 嶺翁 知専 光岸寺 了因 観江 了円

会奉行 毫撰寺 法盛寺 興善寺 本善寺 本照寺 中将 (五二丁オ)

一法衣 逮夜日中法服七条 晨朝鈍色五条指貫

初夜裳付五条

一御伝記拝読人鈍色五条 又初夜小経

漢音有之時 鈍色 五条 指貫 (五二丁ウ)

一斎非時点心 素絹五条指貫但シ結願

斎 鈍色五条指貫

音楽品目

初日 乱声 忝越調音取 回盃楽 (五三丁オ)

颯踏 入破 十天楽 陵王 賀殿急

武徳楽

第二日 乱声 平調音取 万歳楽

三台急 夜半楽 林歌 陪臚 (五三丁ウ)

老君子 合歓塩

第三日 乱声 双調音取 春庭楽

柳花苑 胡飲酒 鳥急 北亭楽

酒胡子 新羅陵王 (五四丁オ)

第四日 乱声 黄鐘調音取

喜春楽 海青楽 十翠楽 河南浦

平蛮楽 桃李花 越天楽

第五日 盤涉調音 採桑老 (五四丁ウ)

輪台 青海波 蘇莫者 劍氣禪脱
竹林楽 千秋楽

第六日同第一日 第七日同第二日

第八日同第三日 第九日同第四日 (五五丁オ)

第十日同第五日 調子雖同音楽品目異

当日 乱声 大食調音取 賀王恩

天人楽 仙遊霞 庶人三台 拔頭

打球楽 還城楽 (五五丁ウ)

龍谷御法事申刻半

一廿八日々中過於龍谷拝堂御法事有之

喚鐘鳴テ登高座 塗香焼香 念珠 法盛寺

重誓偈 始磬二丁 終一丁 十方念仏終一丁 (五六丁オ)

後唄 略同音有 終三丁

一兩御所様御出座 御廟前ニテ御焼香

直御退出 次本徳寺殿礼盤ノ東敷居

際ニテ焼香焼香卓出之次院家衆上首 (五六丁ウ)

二人焼香有之出仕院家内陣余

間五十人御堂衆不残 衣体 素絹 五条 指貫 (五七丁オ)

(史料本文、以上)

※ ※ ※ ※ ※ ※

《編集後記》 一九九一年(平成三) 四月に編集子が、ほぼ事後承諾のような形で当時の本願寺史料研究所所長の千葉兼隆先生に許可をもらい、所報の第一号を手作りで発行して二十年を少し超えました。以来、四十五号目です。発行回数が少ないのか多いのか、編集子には判りません。刊行当初、千葉先生より注意されていた「三号雑誌で終わらないように」との条件は、はるかにクリアしているわけですから、その点については、とりあえず合格なのでしょう。

千葉先生が許可された背景は、研究所が保管している古文書・古記録を整理して研究利用しなさい、そして沈滞が続く真宗史研究をほんの少しでも活性化させなさいとの期待ではなかったかと、現在の編集子は思っています。先生のそのようなお考えがもつともよく現れたのが、先年の蓮如上人五百回忌遠忌の記念出版として『講座蓮如』を企画されたときです。蓮如研究としては第四巻までで内容的に完結しているものを、「地域教団編」として第五巻・第六巻を追加し、しかも地域で真宗史研究を進めておられる研究者を執筆者の中心に起用されたことに現れています。今振り返って気付く千葉先生の意図という面からすると、千葉先生には申しわけありませんが、所報はなんとも力不足であることはまぎれもない現実です。研究の「質」に比肩できるほどの「量」にはほど遠いわけですから、まだまだ発行回数が少ないということでしょう。

この二十数年、編集子としては、原稿集めや編集作業をそれなりに楽しんで来ました。「継続は力だ」と力む積もりはありません。マイナー指向が強い編集子には、細く、長く、ささやかに、というのがもつとも性に合っています。とはいってもその編集子の暦も一回りしたところで、いささかマンネリというか、疲労感というか、発行当初のような新鮮味を感じられなくなっているというのも正直な実感です。力まずに、どのよ

うにネジを巻き直すか? 手抜きしながらでも継続するのがいいのか、思い切って休養するのがいいのか、「ピミョウ」に迷っています。

ところで、偶然目にしたあるテレビ番組で、過疎・高齢化した僻地における「地域社会の復興」というテーマが採り上げられていました。その時に、テーマの専門家として出演していた研究者が、「地域社会の復興」に必要な三つの要素を、「若者・よそ者・ばか者」(この「ばか者」という表現に侮蔑的な意味はまったくありません)と纏めたことが印象に残りました。そのときにすぐに私の頭に浮上してきたのは、毛沢東だつたと思いますが(うろ覚えです)、社会を変革する主体となる存在として「若いこと、貧しいこと、無名であること」を挙げていたことです。表現上は、先の三つの要素と共通するのは「若い」ということだけのようにみえますが、私にはすべて共通しているように思えます。古い人間関係のしがらみや利害関係に囚われず、失敗しても失うものも少なく、「なんで、そんな損な役回りを引き受けて、率先して動くの、アホちゃうか」と周囲からみられても、動じない臨機応変な行動力を発揮し、そしてそのもつとも根本にあるのが若く柔軟なインテリジェンスに支えられた「愚直」性だと思えます。編集子自らを振り返ると、三つの要素のうち、大半の要素をすでに失っています。かろうじて相対的な「よそ者」性が少し残っているくらいでしょうか。しかし、今からでも編集子が自覚的に足を置くことができる要素もあります。インテリジェンスについては横に置くとして、それは「愚直」性なのだろうと思います。

と考えると、先の「ピミョウ」な迷いの行き先は、手抜きしながらでも、刊行できるときに刊行して、ポチポチと継続するのがいいか、となるのでしょうか。とはいっても、世の中も人も、「リクツ」だけでは簡単には片付きません。

(歩弥紡)